



2016年（平成28年）

1月18日

月曜日

日刊 産

磁石についた一文銭『背元』



友人に『寛永通寶』一文銭の中に磁石につくものがある、と言つと「銅の精錬技術が未熟だった

鉄のふしぎ？博物館

■40

『技術の進歩』

『文銭』と『背元』

		文銭	元
発行年	西暦	1668年	1741年
	和暦	寛文8年	寛保元年
製造地		江戸亀戸	大坂高津
重量 g	10枚	36	23
外径 mm		25	22.7
厚み mm		1.2	0.9
□穴 mm		6	6.2
色		赤銅	赤銅
磁石につく10枚中		0	10

為、鉄分が取り除けずに残ってしまったんだ」という。一文銭の比較写真を見て頂こう、左は『文銭』右は『背元』と古銭の業界では識別しています。右は技術力が不十分と見えるから古いもの、左は新しい銭貨だと判断する人が多い。技術は時間経過と共に進歩するものと思ひ込んでいる現代

うが、一般的にはそうでしょうが、諸般の事情で異なる場合もあります。『寛永通寶』の探検途中からそう思ひ始めました。左の一文銭は『寛永通寶』の初期段階に作られた『文銭』と呼ばれ、人々に喜ばれた銭貨です。文字が綺麗で正確に浮き出しています。寛文8年（1668年）から江戸の亀戸

人が多いので



『文銭』と『背元』

で作られました。右の一文銭は『背元』と呼ばれたもので、左の文銭が作られた70年ほど後になります。『寛永通寶』の文字は不正確だし外径も小さく、重量も23グラムと文銭の60%強で、同じ一文銭とは思えないほどです。どうしてこんなことが起こったのでしょうか。江戸時代は鎖国だった

で貿易は行われなかった、とお考えの方も大勢おられるでしょうが、長崎の出島を拠点にしたオランダ貿易が盛んに行われていました。主な輸入品は生糸、その他織物類として羅紗、ビロード、などの毛織物、木綿や麻の織物。他には砂糖、各種香料、薬などがありました。また、装飾品、書籍、学術用具（地球儀）なども輸入しました。

当初、決済は銀でした。が、輸入量の増加と銀産出量の減少で銀が不足しました。幕府はちょうど文銭の発行された寛文8年（1668年）、銀の輸出を禁止銅によって決済することになりました。『寛永通寶』が初めて発行されたのは寛永13年（1636年）、以来100年が経過しインフレが徐々に進みました。そして製造原価を下げるため、一文銭は少し小さなもの、薄いもの、軽いものが作られるようになり、『背元』のように極端に小さく、軽くなった一文銭も生まれました。銅真鍮（しんちゅう）の地金類が高騰したのが致命的になり、製造原価が一文に近くなってしまったのです。銭貨の品質が低下した主要因は製造原価の上昇でした。

コスト上昇が低品質の商品を生む。ヨーロッパで排ガス規制をこまかく打ち打ちターを偽装した杭打ち業者、それを見逃し続けた大手建築業者。利益が出ているように見せかけ、社会と従業員、株主をだまし続けた電機製品の大手業者など、現代になっても同様の考えや行動は変わらないうものですね。しかし、現代のほうが悪質で罪深い気がします。

もの、薄いもの、軽いものが作られるようになり、『背元』のように極端に小さく、軽くなった一文銭も生まれました。銅真鍮（しんちゅう）の地金類が高騰したのが致命的になり、製造原価が一文に近くなってしまったのです。銭貨の品質が低下した主要因は製造原価の上昇でした。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。